

ワシントン大学図書館研修報告

ふじもと ゆうこ
藤本 優子
(メディアセンター本部)

1 研修概要

2016年2月から7月までの半年間、米国のワシントン州シアトルにあるワシントン大学（University of Washington, 以下UW）で研修する機会をいただいた。ワシントン大学東アジア図書館（University of Washington, East Asia Library, 以下EAL）は、日本の大学や研究機関に所属する図書館員を3年間で3人招聘するTateuchi Visiting Librarian Projectを2016年に開始した。日本からの図書館員は、半年間の滞在中にEALの特徴的なコレクションの目録作成や整理などに取り組むとともに、EALやワシントン大学図書館（University of Washington Libraries, 以下UW Libraries）で行われる会議やトレーニングおよび米国で行われる国際的なカンファレンスに参加することができ、毎月のレポート提出と日本の図書館事情等について紹介するプレゼンテーションを行うことが求められている。本プロジェクトはTateuchi Foundation¹⁾の資金援助を受けており、渡航費やカンファレンスへの参加費、生活費等の経済的なサポートを受けることができる。この度First Tateuchi Visiting Japanese Librarianとして、EALを拠点とし、寄贈された日本語の漫画コレクションの目録作成を中心にUW Librariesおよび他大学の図書館見学や様々な会議への参加を行った。

2 ワシントン大学

UWは1861年に創立された州立大学であり米国西海岸で最も古くからある大学の一つである。ワシントン州のシアトル、ボセル、タコマの3キャンパスに4万人を超える学部生と約1万5千人の大学院生および教員が所属し、あわせて16の学部と大学院を有する大規模大学である²⁾。2016年ノーベル物理学賞受賞を含め7名のノーベル賞受賞者を輩出している。Academic Ranking of World Universities 2016では15位に位置³⁾し、パブリックアイビーと呼ばれる名門州立大学にその名を連ねている。



図1 ワシントン大学

UW Librariesはシアトルにある13の図書館とUW Bothell/Cascadia Library, UW Tacoma Library, Friday Harbor Libraryからなる16の図書館で構成されている。蔵書数約800万冊、電子ブック60万冊を提供している。年間の来館者は約500万人⁴⁾、3万件的の対面および1万5千件のオンラインレファレンスに対応している。70名のサブジェクトライブラリアンが学生と教員の研究を支えている⁵⁾。メインライブラリーであるSuzzallo and Allen LibrariesにあるSuzzallo Reading Roomは、The GuardianのThe most beautiful libraries in America 2016に選ばれ⁶⁾、通称“Harry Potter Library”として観光客にも大人気である。



図2 Suzzallo Library正面



図3 Suzzallo Reading Room

EALは1937年にロックフェラー財団からの資金援助によって小さな中国文学のコレクションを購入したことに始まり、コロンビア大学からの寄贈やロックフェラー財団からの追加の援助を経て蔵書を増やしてきたが、その当時はSuzzallo Libraryの中のOriental Seminar Roomに未整理の状態で配架されていた。1946年にFar Eastern Instituteが設立されるとOriental Seminar RoomのコレクションはFar Eastern Libraryとなった。その後、日本や韓国のコレクションが徐々に加わり、1976年に現在のGowen Hallに移り名称もEast Asia Libraryとなった⁷⁾。蔵書数は約64万冊、電子ブック6万5千冊を提供している⁸⁾。年間の来館者は5万8千人である⁴⁾。中国、日本、韓国(CJK)を専門とする3名のサブジェク

トライブラリアンがおり、東アジアに関する学習、教育、研究を幅広くサポートしている米国有数の東アジア図書館である。



図4 East Asia Library Reading Room

3 日本語の漫画の目録作成

EALに寄贈された段ボール8箱分の日本語の漫画の目録を作成することがこの度のミッションであった。漫画はコミックスが中心で『ブラック・ジャック』『ガラスの仮面』『ONE PIECE』というように少女・少年漫画、SF、ボーイズラブ等様々なものが含まれていた。すでに所蔵している重複分は除き、それ以外にも寄贈された漫画を含め、最終的に238タイトル932冊の目録を作成した。これに関連して“Expansion of Manga Studies”と題する展示も行った。



図5 寄贈された漫画

現在は電子資源担当であり、これまでの業務において目録を担当したことがなかったため、渡米前に目録担当からAACR 2（英米目録規則第2版）による慶應での目録作成について研修を受けた。渡米後はEALのQuick Cataloging SpecialistであるSaori Tachibana氏とテクニカルサービスのチーフであるChinese CatalogerのCharlene Chou氏のとても丁寧なわかりやすいトレーニングのおかげでResource Description and Access（以下、RDA）による目録作成について学ぶとともにミッションを無事終えることができた。図書館内のあらゆる情報が共有されているStaff WebにはRDAに関する詳細なマニュアルが掲載されており理解の助けとなった。UW Librariesで使用している図書館システムとEALでの具体的な作業について紹介する。

(1) 図書館システムAlma

Orbis Cascade Alliance（以下、OCA。詳細は後述。）の一員であるUW Librariesは、2013年にInnovative社のMilleniumからExLibris社のAlmaにシステムリプレースを行った。よりよい利用者へのサービスを目指してOCAがコンソーシアムでAlmaへ移行することを決定したためである。Almaはクラウドベースのシステムで、冊子と電子を一つのプラットフォームで管理することができ、リンクリゾルバの機能も内包している⁹⁾。画面はタスクベースになっており、権限や担当によって表示される項目が異なる。目録業務の画面では、自館の所蔵が表示されるインスティテュションゾーン（IZ）、コンソーシアム参加機関の所蔵が表示されるネットワークゾーン（NZ）、主にExLibrisが管理・提供するレコードが表示されるコミュニティゾーン（CZ）と3つに分かれており、OCAはNZで書誌レコードを共有して目録における各大学の業務の軽減を図っている。

Almaに移行した当初は所蔵しているはずの資料が検索できない、自動で行えるはずの機能が使えない、使えたとしても人の目によるチェックが必要で時間がかかるというように不具合が多かったと聞いた。現在も業務を行いながら各担当で試行錯誤し改善に取り組んでいる。

(2) RDAによる目録作成

RDAは、AACR2に代わる新しい目録規則であり、Functional Requirements for Bibliographic

Records（FRBR）つまり書誌レコードの機能要件に基づいている。図書館が所蔵している資料に限らず広く情報資源を発見するためのツールを提供し、利用者の利便性を第一に考えるという特徴がある¹⁰⁾。UW Librariesでは目録規則はRDA、書誌フォーマットはMARC21を使用している。

目録作成の流れは次の通りである。① AlmaのIZとNZでの所蔵調査を行い、② OCLC Connectionに向かってRDAで作成されているレコードの有無を確認する、③ UW Librariesで規定されている基準に達するレコードがあればそれを、なかった場合にはレコードをエンハンス（品質向上のための修正・追加）するかOCLC Connection上でオリジナルを作成し、④ Almaにエクスポートする。その後、⑤ Almaで発注や所蔵をつける。

今回の漫画の整理に当たっては、1タイトル1レコードを作成し、その下に所蔵を加えていった。扱う資料が日本語の漫画だったためNZにあるコンソーシアム参加機関のレコードを流用することはほぼなく、半数を超える132タイトル473冊のオリジナルレコードを作成し、残りはOCLC Connection内のレコードのエンハンスを行った。AACR2時代と異なる主な点は、physical descriptionである336（content type）、337（media type）、338（carrier type）、Index term-Genre/Formである655の入力が追加された点、省略形を使わず利用者にもわかりやすいように単語全てを記載するようになった点、そして“cataloger’s judgement”である。作業をしていく中でよく見聞きした印象的な言葉である。AACR2に比べ記述の仕方について目録作成者に判断が委ねられていることが多いため、利用者の立場で検索しやすいように作成することが重要であると感じた。また、レコードをエンハンスするということは、該当レコードを共有している他大学の目録をも書き換えてしまうことを意味しており、多くの図書館員によって内容をリッチにすることができるメリットがある一方、間違いがあった場合には影響が広範囲に及ぶというデメリットもあり慎重に行う必要がある。

4 会議と図書館見学

研修期間中にはシアトルとポートランドで行われた会議に参加し、UW Librariesのシアトルにある

13の図書館だけでなく米国西海岸およびカナダの大学図書館を見学させていただいた。紙面に限りがあるため参加した会議と見学させていただいた施設や資料の全てについて詳細に述べることはできないが、印象的だった点について以下に紹介したい。

(1) The Council on East Asian Library

2016年3月28日から4月1日までThe Council on East Asian Libraries¹¹⁾ (以下、CEAL) の年次大会およびそれに付随するワークショップがシアトルのシェラトンホテルとUWを会場として、そして3月31日から4月3日までAssociation for Asian Studies (以下、AAS) の年次大会が同じくシェラトンホテルとワシントン州コンベンションセンターで行われた。CEALはAASの下部組織であり1958年に設立された東アジア図書館協議会である。

幸いなことにUWがホストとなって開催したカタログリングワークショップをはじめ一連のイベントに参加することができ、Suzzallo and Allen LibrariesとEALを巡る見学ツアーのお手伝いもさせていただいた。ワークショップの一コマではCJKにおけるシリーズのナンバリングや出版年の数字の表記についてディスカッションをしながらアイデアを出し合い、その場でベストプラクティスを決めていくというダイナミックな過程を目の当たりにした。RDAは日々変化し続けており、カタログの方からは追いかけていくのが大変という声を耳にした。



図6 CEAL Cataloging Workshop

会議を通して感じたのは北米で中国と韓国の存在感が強まっており、相対的に日本の存在感が希薄になりつつあるのではないかという危機感であった。韓国は若手図書館員に海外の図書館で研修する機会を与えるKorea Foundation Library Internship

Program¹²⁾ を実施しており、CEALにも韓国からのインターンが複数参加していた。そしてまた、図書館員同士のつながりの強さも感じた。Japanese Studies Librarianをはじめ各サブジェクトライブラリアンは各大学に一人しかおらず、蔵書構築、レファレンス、予算管理等を一手に担い、高い専門性を生かして所属する大学の教育・研究を支えている。連日のワークショップや会議の合間を縫って情報交換を行い、大学や国を超えて密に連携し協力関係を築いている様子が窺えた。

(2) Orbis Cascade Alliance Summer Meeting

OCAはオレゴン州、ワシントン州、アイダホ州の学術図書館で構成されているコンソーシアムであり、図書館システム、ワークフロー、ポリシーを共有している。オレゴン州に設立されたOrbisとワシントン州を中心とするCascadeという2つのコンソーシアムが2003年に合併して誕生し、2016年10月現在39の図書館が参加しFTEの学生数は27万5千人を超えている¹³⁾。年間25万3千冊の図書を共有するとともに電子リソースの共同購入も行っている。電子ジャーナルやデータベースだけではなく、近年はEbookにおいてもコンソーシアムでのDemand-Driven Acquisition (DDA) とサブスクリプションを組み合わせたモデルやUsage Based Collection Managementモデルを試行する等、積極的に取り組んでいる。

毎年7月にSummer Meetingが行われており、2016年は7月12日から15日まで4日間の日程でオレゴン州ポートランドのワーナーパシフィックカレッジにて開催された。Shared Content TeamやDiscovery & Delivery Teamといった各チームのミーティングやCouncil Meetingに加え、Primo DayやAlma Analyticsのトレーニングも行われている中で、7月13日に行われたBreakout sessionsに参加した。Primoがテーマとなっているセッションが多いように感じたが、その他にもEbook、オープンテキスト、オーソリティコントロール、コピーポリシー等興味深いトピックが目白押しであった。例年会期を通して300~400人が参加すると聞いたが、終始とてもアットホームな雰囲気であった。この度のCouncil Meetingの議題の一つは、Shared ILS導入後の自分たちの業務プロセスを評価することであり2016-2017の重要な検討事項となっていた。種類

も規模も異なる大学が集まっているコンソーシアムで共通のシステムを導入し業務を行うということは様々な課題を抱えていると考えられる。今後どのように評価され共働していくのか注目したい。



図7 OCA Summer Meeting Plenary

(3) 米国西海岸およびカナダ大学図書館探訪

CEALで出会ったカタログガーの方々やUWで出会った研究者の方をたより、米国西海岸はUWと同じ州立大学であるUniversity of California, Berkeleyと私立大学であるStanford UniversityそしてカナダはUniversity of British Columbia（以下、UBC）の東アジア図書館を中心に訪ねた。

University of California, BerkeleyのC. V. Starr East Asian Libraryは米国有数の日本語コレクションを誇っている。その中でも貴重書室に所蔵されている三井コレクションを見学させていただいた。いつでもどこからでもアクセスできるように貴重書はデジタル化を進めているが、現物の閲覧希望もいまだ多い。現物を手に取らなければわからないこともあり、デジタルと現物の両方を提供していくことの重要性を感じた。

Stanford UniversityのEast Asia Libraryではいくつか特徴のある日本語コレクションを見せていただいた。例えば東日本大震災に関連した日本語の絵本を描えているコーナーや、芥川賞や直木賞だけではなくライトノベルも含め様々な賞の受賞作品を並べているコーナーがあり興味深かった。日本語を学習し始めた学生にはちょうど良い学習用の資料となる

とのことであった。日本の図書館に期待することがあるか伺ったところ、特に困っている様子はなかったがお互い途中までしか持っていない資料があった場合に、デジタル化してつなげることができれば研究者にとって大きな助けになるのではないかと話してくださった。

UBCのAsian Libraryが入っているAsian Centerは1970年の大阪万博のときの三洋館をそのまま移築しており、その建物が一際特徴的であった。万博の終了後、UBCへ国際親善と友好の証として寄贈され1981年に現在の場所に再建された¹⁴⁾。UBCは唯一訪れることのできたカナダの大学であり見どころも多かったため、図書館だけではなくMuseum of Anthropology（人類学博物館）や新渡戸記念庭園なども訪れた。バンクーバーはシアトルから飛行機で約1時間の距離に位置しているが、米国とは異なるカナダの文化と歴史を垣間見ることができた。

5 おわりに

シアトルは豊かな自然と温暖な気候からエメラルドシティの愛称で親しまれており、冬は雨が多いが、春は日本に負けないうくらい桜が美しく、夏は爽やかで冷房がいらないくらい過ごしやすい。米国本土では日本に最も近く、歴史を遡れば明治時代から交流があるため、日本に興味を持っている人や日本に何らかのルーツを持つ人も多く、日本人になじみやすい環境であった。

そのようなシアトルの地で多くの人に出会い、様々な刺激を受け、日常の業務から離れ視野を広げる貴重な機会を得られた。日本研究に携わっている世界中の研究者がどのような資料や情報を求めているかを理解し、日本研究を支えている図書館に対してどのような支援をし、どのように連携していくことができるかについて日本の図書館は考え続けていく必要があると感じた。その中で慶應はどのような役割を果たすことができるのか、そしてまた、EALやUW Librariesと今後どのような関係を築いていけるだろうかと研修期間を通して考えるようになった。研修中に得たことを忘れずにどのように生かしていくことができるかを常に心に留めながら日々の業務に努めていきたい。

半年間の研修中に数えきれないほどの多くの方々にお世話になった。温かく迎えてくださったEALの

館長であるZhijia Shen氏, 様々な面からサポートしてくださったJapanese Studies Librarianの田中あずさ氏, EALそしてUWの皆様をはじめ, Tateuchi FoundationのIna Goodwin Teteuchi氏, 米国とカナダの図書館を案内してくださった皆様, そして多忙な業務の中事前研修をしてくださり快く送り出してくださったメディアセンター本部の皆様に心より感謝を申し上げたい。

参考文献

- 1) Tateuchi Foundation.
<http://www.tateuchi.org/>, (accessed 2016-10-17).
- 2) Univeresity of Washington. Fast Facts: 2016.
http://opb.washington.edu/sites/default/files/opb/Data/2016_Fast_Facts.pdf, (accessed 2016-10-24).
- 3) Shanghai ranking consultancy. Academic ranking of world universities 2016.
<http://www.shanghairanking.com/ARWU2016.html>, (accessed 2016-10-30).
- 4) University of Washington Libraries. 2011_2015 Gate Counts.
<https://digital.lib.washington.edu/researchworks/handle/1773/25928>, (accessed 2016-10-24).
- 5) University of Washington Libraries. Libraries fact sheet 2015.
<https://www.lib.washington.edu/assessment/stats/facts>, (accessed 2016-10-24).
- 6) The Guardian. The most beautiful libraries in America 2016.
<https://www.theguardian.com/us-news/gallery/2016/oct/06/most-beautiful-libraries-america-pictures>, (accessed 2016-10-24).
- 7) University of Washington East Asia Library. History.
<http://www.lib.washington.edu/east-asia/about>, (accessed 2016-10-24).
- 8) Doll, V., Liu, W. Council on East Asian Libraries Statistics 2014-2015. Journal of East Asian Libraries. 2016, Vol.2016, No.162, p.41-62, Article 5.
<https://kuscholarworks.ku.edu/handle/1808/20316>, (accessed 2016-10-24).
- 9) ExLibris. Why your library should move to Ex Libris Alma.
<http://www.exlibrisgroup.com/files/Products/Alma/WhyAlma.pdf>, (accessed 2016-10-30).
- 10) 上田修一, 蟹瀬智弘. RDA入門: 目録規則の新たな展開. 東京, 日本図書館協会, 2014, 205p.
- 11) Council on East Asian Libraries.
<http://www.eastasianlib.org/>, (accessed 2016-10-17).
- 12) Korean Foundation. KF Library Internship.
<https://en.kf.or.kr/?menuno=3757>, (accessed 2016-10-24).
- 13) Orbis Cascade Alliance. <https://www.orbiscascade.org/>, (accessed 2016-10-17).
- 14) UBCアジア図書館50周年祝典式. パンクーパー新報. 2010年3月11日号掲載.
<http://blogs.ubc.ca/libnews/files/2010/03/UBC111.pdf>, (accessed 2016-10-28).